

目的 平面構成である和服は標準寸法で仕立て、着装する際に着用者の立場や体格、着用目的によって紐及び帯で固定して着方を変化させる形が定着している。しかし、標準寸法で仕立てられている以上、どの人にも簡単に美しく着装できるとは限らない。特に着装した際、最も目立つ衿あしや衿元については問題が生じやすい。このことから、抜き衣紋に深く関与したくりこし寸法に着目して現状を分析し考察することを目的とした。

方法 天竺木綿で大裁女物長着の上半身、袖なしのサンプルを作成し、痩せ型、普通型、肥満型の体格の異なる3名の被験者に着装させて、衿の状態を観察した。サンプルは、くりこし寸法のみを0、1、2、3、4 cmと変化させ、衿幅、衿下がり等その他の条件は同一とした5枚である。

結果 肩山を一定にした場合、くりこし寸法が増加すると衿は後方に抜けやすくなる。体型別にみた場合、痩せ型の人がかくりこし寸法1 cmのサンプルを着装した時の衿の状態は普通型の人が2 cm、肥満型の人が3 cmをそれぞれ着装した時と同様であった。また、痩せ型ではくりこし寸法が0 cmでも着装時の調節で衿を抜くことが可能であり、2 cmで最も美しく簡単に着装できる状態であった。普通型では2～3 cm、肥満型では3 cmが適当で訪問着や年配向きには4 cmでも適当な抜け方であった。このことから、現在のくりこしの標準寸法はほとんどの資料で2 cmとされているが、首の太さや肩の厚みなどを考慮し、体格にあったくりこし寸法を決めて仕立てることで着装を容易にすることができると考察された。